子育て

seikatsu@asahi.com

日曜掲載

SNSで祖父母と近く

孫のアシギ

「孫の様子をもっと知りたい」「おじいちゃんおばあちゃんに、連絡を取らなければ」――。離れて暮らしていると生活のペースがずれて、連絡が取りにくいことも。ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）をうまく使えば、家族の距離が縮まるかもしれません。

離れていても「生活わかる」

東京都内に住むウエディングプランナーの伊勢香苗さん(34)は、閲覧を家族に限定したSNSで、子どもの成長をつづっている。

伊勢さんには4歳の長女と、2歳の長男がいる。長女を妊娠したのをきっかけに、育児日記代わりにインターネット上でブログを書くようになった。

主な読者は、神戸に住む実父母と福岡にいる義母。ただ、ブログは不特定多数の目にも触れる。顔がわからないよう写真を加工するようになったが、「おじいちゃんおばあちゃんは子どもたちの顔が見たいのに、これでは意味がない」と感じた。

友達に話すと、教えてくれたのが、子どもの成長を記録できるSNS「ウェルノート」だ。帰省の折に親たちに使い方を教え、5月からスタートさせた。見る人を限定しているので、写真も安心して載せている。

書き込むのは、電話するほどではない日常のあれこれだ。補助輪なしで自転車に乗れるようになったこと、七夕の短冊にお願いを書いたこと。親たちはすぐに返事を書いてくれる。おいしそうにメロンを食べている写真を見た義母の千春さん(61)は「メロンが好きだったんだね。今度帰省するとき用意しとくね」。返事を子どもたちに伝えると、「ばあばに電話しよう」となることもある。

離れて住んでいるので定期的に連絡したいと思うが、育児や仕事が忙しく、気づくと時間がたっている。会社勤めの千春さんを「疲れているかも」などと気遣ううちに、2、3カ月ぶりの電話になることも。「返事を書き込んでくれると、親たちが元気にしているのもわかります」

居間にタブレット端末「iPad」を置き、書き込みを楽しみにしている千春さんは「近くに別の孫が住んでいるけれど、会えそうでなかなか会えない。離れていても孫たちの生活がよくわかるのでうれしい」と話す。写真を自分でアップできるよう、今度やり方を教わるつもりだ。

触れ合い偏り緩和も

第一生命経済研究所の北村安樹子主任研究員は、「SNSを使ったコミュニケーションは、バーチャルな居間になり得る」と話す。何げない出来事がアップされることで、より臨場感を持って日常生活を共有できるからだという。

北村さんが2007年に実施した調査によると、50～79歳の祖父母416人のうち、「孫がいることに張り合いや生きがいを感じる」と答えたのは祖父が95%、祖母は91%。「孫の子育てにもう少し関わりたい」と考える人は、祖父で47%、祖母で33%いた。

電通がインターネットを通じて実施した12年の調査では、「娘の子」の方が「息子の子」よりよく会うとの結果が出た。老後が長くなり時間ができた祖父母は、孫とのコミュニケーションへの欲求が高いが、娘の子かどうかで触れ合いに偏りが生まれがちだという。北村さんは「書き込みたい時に書き込め、見たい時に見られるSNSは、偏りを緩和できるのでは。祖父母世代の生活の幅を広げることにもなる」と話す。（山田佳奈）

セキュリティー必須・無理強いせず

親世代と祖父母世代がSNSでコミュニケーションをとる場合の注意点を、ITジャーナリストの高橋暁子さんに聞いた。

まず、安全面。利用するサービスが指定するセキュリティーをきちんと設定しよう。パスワードは使い回さない。祖父母世代がネットを苦手とする場合は、帰省時に端末に設定し、使い方も伝えるといい。

きちんと書こうと思うとおっくうになるが、七五三や運動会、誕生日など、イベントの記録にと考えると書きやすい。写真を載せるだけでもいい。

書き込みは、お互い余裕のあるときに。「もっと知りたい」「感想はないのかな」などと感じても、相手に無理強いしないようにしよう。

何げない言葉に過ぎなくても、文字にするときつい印象になることがある。例えば「お菓子は食べさせないので買わないで」など、否定的な感情がまじる言葉は書き込まない。そうしたお願いや相談は、なるべく直接会った時や電話で、相手の反応を見ながら伝えよう。

祖父母にとっては、孫がいま何に興味があるかわかると、会った時に話題にしやすい。SNSでのやり取りが安否確認代わりにもなる。

掲載日2014年8月10日付　朝日新聞　27面

※朝日新聞社から記事利用の許諾を受けています